

読解 現代文で読む古典と民話

日本の文学

監修 ● 玉村文郎
編著 ● 玉村千恵子

第一部 平仮名中心・文節分かち書きによる本文
第二部 教育漢字交じり・非分別書法による本文

にほんこの凡人社



読解 現代文で読む古典と民話

監修 ● 玉村文郎
編著 ● 玉村千恵子

江苏工业学院图书馆
藏书章

日本の文学

第一部 平仮名中心・文節分かち書きによる本文
第二部 教育漢字交じり・非分別書法による本文

にほんこの 凡人社

監修 玉村文郎 (たまむら ふみお)

同志社大学文学部教授

編著者紹介

玉村千恵子 (たまむら ちえこ)

京都外国語大学非常勤講師

〔著書・論文等〕

○日本語教育学会編『京都・大阪とその周辺
—— 近畿地方 ——』（凡人社）共著

○嗅覚と非嗅覚 —— 合成語「——くさい」を
めぐって ——（『日本語』—— 6 号 所収
1988 年 6 月）

読解 現代文で読む古典と民話 —— 日本の文学

1992 年 5 月 25 日 初版第 1 刷発行

監修者 玉村文郎

編著者 玉村千恵子

発行者 田中久光

発行所 株式会社 凡人社

〒102 東京都千代田区麴町 6 丁目 2 番地
(麴町ニュー弥彦ビル 2 階)

電話 03(3472)2240

大連外國語學院

日語部敎研室

書心存

玉

村

又郎

一九九四年
秋

千惠子

日本語教育の世界が年とともに視野を広げ、新しい素材を獲得しつつあることは、まことに喜ばしいことです。こと教科書に限っても数年前とは様相が一変して、単に点数が増えただけでなく、多様な分野にわたって、質の高いすぐれたものが次々に刊行されて、共通の財産が増えつつあります。

しかし、そういう賑わいの中にあつて、文学的教材のみが、ほとんど開発されずに来ているのは、まことにさびしいことでした。アメリカやブラジルで日本語を教えている方々から、平易な日本語で書かれた文学的読物がほしいと訴えられ、一再ならず強い焦躁感をおぼえたことがあります。そこで、このような渇を癒やすべく日本文学に取材した教科書の編集を計画しました。

幸い、大学での日本語教育の経験の中から編集された文学の教科書が今回世に出ることになり、私たちの年来の願望が満たされることになりました。

文型や読解と同様に、文学も初級から教えられるという生きた実践の結晶が誕生し、形象・啓発の教材が加わったことを喜び、本書を多くの方々のご利用に供したいとおもいます。

一九九二年三月

はじめに

一、本書は、日本語学習の初級および中級の外国人学生を対象に想定して作製した、日本文学・民話に取材した「読解用日本語教科書」である。作製にあたっては、学生の読書欲を誘発し、興味を持たせられることを心がけた。入門期の段階から、生の日本語で、日本文学を味わい、日本人の心性を理解する喜びを体得させ、同時に日本語力の増進を図ることが、本書のねらいである。

二、右の趣旨により、次の諸点に留意しつつ、作品の選択を行い、現代語による再話を行った。

1. 基本的な文型、平易な表現を使いながらも、極力こなれた日本語の修得に資することを目的とする。
2. 代表的で、かつ親しみを持たせられる作品を選ぶ。
3. 平易な表現の中に原作・原語の持つ味わいを生かし、登場人物の心理や情況が的確に把握できるように工夫する。
4. 漢字圏および中級以上の学習者の便宜を図り、第一部の「平仮名中心・文節分かち書き」を「教育漢字交じり・非分別書法」に書き改めた第二部を加えた。これによって、母語を異にする学生や、漢字力に差のある学生を含むクラスにおいても、十分使用できる教材となる。
5. 全十五課に「練習問題」を付し、教授者の指導の参考に供するとともに、学習者の理解を図る一助とする。

「練習問題」は、文章の内容を把握し、形象の理解を進める設問とし、総合的な読解力を高めることを中心に設定した。

6. 課ごとに、基本的な新出文型を提示した。

7. 特殊な語句については、当該箇所には脚注のかたちで、説明を施した。この注はできるかぎり日本語による簡潔な説明とした。

三、本書作製にあたって種々助言をくださった各位、とりわけ凡人社の社長田中久光氏と編集部増田秀男氏に心から感謝申し上げます。

一九九二年三月

玉村千恵子

もくじ

監修者のことば i

はじめに ii

第一部

だい一か つるの おんがえし 3

だい二か ちごと ぼたもち 11

だい三か 一休さん 16

だい四か ゆめうらばし 21

だい五か かぐやひめ 26

だい六か りょうあん先生 32

だい七か うらしまたろう 35

第二部

つるの恩返し 91

ちごとぼたもち 93

一休さん 95

夢うら橋 96

かぐやひめ 98

りょうあん先生 100

うらしま太郎 101

だい八か ねずみ・うし・とら 42

だい九か こぶとり 46

だい十か ひろまさの ふえ 54

だい十一か 日本の ことわざ 59

だい十二か はなが ながい ぼうさん 62

だい十三か はかまだれと やすまさ 68

だい十四か 日本の 詩 74

だい十五か あらたまの 年の みとせ 82

ねずみ・うし・とら 104

こぶ取り 105

博雅の笛 109

日本のことわざ 110

鼻が長いぼうさん 111

袴垂と保昌 114

日本の詩 116

新玉の年の三年 120

各課別新出漢字一覧表 87

第一部



● 平仮名中心・文節分かち書きによる本文
● 各課別新出漢字一覧表



つるの おんがえし



あるむらに、よへいという わかものが いました。ある日 よへいは、山へ
いきました。木の したで バタバタと おとが します。みると 山みちに
一わの つるが いました。つるは けがを していました。よへいは、つるを
たすけました。つるは げんきに なりました。そして よろこんで そらに
とんで いきました。

その日から 一しゅうかんが すぎました。そのばん うつくしい むすめが、
よへいの いえに きました。むすめの なまえは つうです。つうは よへい
の せわを します。おいしい ごはんを つくります。よく はたらきます。
つうは、よへいの つまに なりました。二人は、とても しあわせでした。

ある日 つうが、よへいに いいました。

「わたしは、とても うつくしい ぬのを おることが できます。いまから
ぬのを おります。そのあいだは へやの なかを みないでください」

よへいは やくそくしました。つうは、一人で おくの へやに はいって、と

をしめました。カタリ コトリと おとだけが します。よへいは、そのへやの なかを みませんでした。

三日が すぎました。つうが へやから でてきました。たいへん うつくしいぬのを もっていました。そして よへいに いいました。

「このぬのを まちに もっていつて、うつてください」

よへいは ぬのを もって まちへ いきました。まちの 人たちは ぬのをみて たいへん おどろきました。いままで みんな、こんな うつくしいぬのを みたことは ありませんでした。かねもちの 人が そのぬのを かいました。かねもちは たくさんのおかねを よへいに わたしました。そして

「こんな ぬのが もっと ほしい」

と いいました。

よへいは とても よろこんで いえに かえりました。つうも よろこびました。よへいは つうに

「こんな ぬのを もっと おってほしい」

と いいました。つうは よへいに

「ぬのは もう おることが できません」

と いつて ことわりました。けれども よへいは なんども なんども

「ぬのを おつてくれ」

と たのみました。

とうとう つうは、よへいに

「では もう 一まいだけ おります」

と いいました。

「でも ほんとうに これで おわりですよ。みないてくださいね」

と いった、つうは おくの へやに はいりました。カタリ コトリと おと
が します。

三日が すぎました。つうは へやから でてきません。五日が すぎました。
やはり つうは へやから でてきません。ときどき カタリ コトリと おと
が します。

よへいは へやの なかが みたく なりました。へやの とを すこし あ
けて なかを みました。

へやの なかに 一わの つるが いました。つるは じぶんの はねを ぬ
いて ぬのを おっています。つうは どこにも いません。よへいは とても
おどろいて とを しめました。

つうが へやから でてきました。とても つかれた ようです。てに う

つくしい　ぬのを　もっています。

つうは

「わたしは　ほんとうは　にんげんでは　ありません。あなたに　たすけて
もらった　つるです。ごおんがえしが　したかったので、あなたの　ところに
きました。

いつまでも　あなたの　そばに　いたかった……。けれども　あなたは　や
くそくを　まもって　くれませんでした。あなたに　つるだと　しられたので、
もう　いっしょに　くらすことは　できません。これからは　このぬのを　わ
たしだと　おもってください。さようなら」

と　いつて　ぬのを　よへいに　わたししました。つうは　つるに　なって　そら
へ　とびあがりました。よへいは

「つう、つう、いけないでくれ」

と　さけびました。

よへいの　こえが　きこえたのでしょうか。つるは　よへいの　いえの　うえ
を　なんどか　とんで　まわりました。そして　コウ　コウと　ちいさい　こえ
で　かなしそうに　なきました。

つるは　だんだん　たかく　とんで　いきました。どんどん　ちいさく　なっ

ていきました。

練習問題

一 つぎの 1〜8の うちに “つう”に あてはまる
ものは どれですか。あてはまる ものの ばんごうに
○を つけなさい。(五つ)

- 1 よく はたらく
- 2 よく まちへ いく
- 3 うつくしい めのを うる
- 4 ごはんを じょうずに つくる
- 5 めのを じょうずに おる
- 6 よへいを しあわせに したいと おもっている
- 7 ほんとうは にんげんでは ない
- 8 やくそくを まもらない

二 つうは なぜ よへいの ところへ ききましたか。た

(参考 民話「鶴女房」)

だしいと おもう ものの ばんごうに ○を つけな
さい。(二つ)

- 1 よへいは いい 人だと おもったから
- 2 よへいは おかねもちだと おもったから
- 3 けがを して とぶことが できなかったから
- 4 よへいに おんがえしが したかったから

三

つうは なぜ よへいと いっしょに くらすことを
やめましたか。ただしいと おもう ものを 一つ え
らんで そのばんごうに ○を つけなさい。

1 — つうは ほんとうは つるだ — と よへい
が したので

2 やくそくを まもらない よへいが きらいにな
ったので

3 よへいと いっしょに いると いつも めのを

おらないと いけないので

4 にんげんで あることが いやになって、つるにもどりたいと おもったので

四 れいに ならって つぎの 1く6の ぶんの (

(の なかに てきとうな なまえを かきなさい。

(れい) () は つるを たすけました。

() は よろこんで そらに とんでいきました。
(こたえ) (よへい) は つるを たすけました。

(つる) は よろこんで そらに とんでいきました。

1 () は () の つまに なりました。

() と () は とても しあわせでした。

2 () は うつくしい めのを おりました。

() は まちで めのを うりました。

3 () は「ぬのを もっと おつてほしい」と

() に いいました。

() は「もう 一まいだけ おります。みないでくださいね」と () に いいました。

4 () は へやの なかを みました。() は

いませんでした。() が 一わ いました。

5 () は つるに なって そらへ とびあがりました。

() は 「つう、つう、いかないでくれ」と さげびました。

6 () は コウ コウと かなしそうに なきました。

() は どんどん ちいさく なっていきました。

五

へつるは よへいの いえの うえを なんとかと んで まわりました。そして コウ コウと ちいさい こえで かなしそうに なきました。(6 ページ 14 行目)

つるは なにを おもつて いたでしょうか。1、2 にならって 3 から あとを かきなさい。

1 よへいさんと いっしょに いるとき わたしは しあわせでした。

2 よへいさん げんきだね。